

川合隆男著

## 『近代日本における社会調査の軌跡』

評者：濱谷 正晴

「わたしは、たとえ雨の日でもぶらりと散歩に出て街の光景、人々の行き交う情景、畑地の野辺の草花の様子などを観ながら、わけもなく歩き回るのがとても楽しい。わたし自身の身のまわりの出来事や世界、そしてそれらの動きや変化などについても、わが身と世界との関わりをあれこれ感じ考えてみることも、それはそれで楽しいし興味深い。」

慶應義塾大学退職後、山形に居を構えた著者・川合隆男氏の人となりや髪髯とさせる書き出しで本書は始まる。川合さんはこうした「日常的な観察・調査」を、「未知の世界に対する興味・好奇心」「新しい経験への欲求」、「排除され抑圧されても奮い去ることはできない情動」として尊重し、「社会観察・社会調査の実施」や「社会観察論・社会調査論」といった学問的な試みと切り離すことなく、それらを相互に関連づけ、循環的なものにしていく、という方法態度を貫く。本書は川合さんにとって、「祖父・祖母、父母、わたし」の三世代による明治初年から第二次世界大戦終戦時頃までの広い意味での経験的世界を、「社会調査史」の視点から読み解いてみようとしたものでもある。

川合隆男さんのお名前を知ったのは、私が原爆被害者問題に関する社会科学的な調査研究の

歴史をサーヴェイしている頃であった。米山桂三氏・原田勝弘氏との連名で、「原爆と社会変動」、「原爆被爆とその後の社会生活」、「原爆被爆者の社会生活の変化」と題する調査報告が1960年代後半の『法学研究』誌に相次いで発表されていた。直接お近づきになれたのは、故島崎稔先生が吉原直樹さんを通じてお声を掛けて下さった「社会調査史研究会」（1985年～）の場であった。「近代日本における社会観察・社会調査の軌跡」をとらえようとする川合さんの問題関心は、まず（1）高野岩三郎らによる「月島調査」の再考察に現れ（1980～82年）。以降、川合さんは、（2）G.イーストホープの『社会調査方法史』（1982年）やS.P.シャドの『ドイツ・ワイマール期の社会調査』（1987年）、J.ベルティング他編『国際比較調査の諸問題』（1988年）、K.プラマー『生活記録の社会学』（1991年）、L.シャッツマン&A.L.ストラウス『フィールド・リサーチ』（1999年）の翻訳を手掛けて欧米における社会調査史研究を日本の読者に紹介する一方、（3）「近代日本社会調査史」を研究する重要性とその課題・枠組みを説いて、慶應義塾大学のゼミナールに参加した多数の若手院生たちとの共同研究により『近代日本社会調査史』の再発掘作業にとりくんだ（全3巻、1989・91・94年）。

本書『近代日本における社会調査の軌跡』の構成は下記のごとくである。一章から九章および2つの補論は、川合さんが1980～2002年の間に書きためてきた作品がもとになっており、一冊の論文集としてまとめあげるにあたり序章と終章が書き下ろされた。

はしがき

序章 社会変動と社会観察・社会調査

第一章 近代日本社会調査史研究の課題

第二章 社会観察の胎動—参与観察としての

第三章 「社会踏査」を試みた「月島調査」  
—近代日本における社会調査方法の  
模索と「月島調査」—

第四章 「月島調査」再考察—わが国近代都  
市労働者生活の形成と「月島調査」  
—

第五章 星野鉄男の保健衛生調査—「愛児の  
ために何を為すか」—

第六章 国勢調査の開始—民勢調査から国勢  
調査へ—

第七章 戸田貞三による社会調査論の展開

第八章 奥井復太郎の都市社会調査

第九章 戦時下・戦中期における失業調査—  
「失業統計調査」と「失業者生活状  
態調査」—

終章 近代日本における社会調査の歩み

補論Ⅰ 「月島調査」について

補論Ⅱ 日本の社会学史と社会調査史

小生は以前、川合隆男編著『近代日本社会調査史』の書評を試みたことがある（『社会学評論』47号）。川合さんはⅠ～Ⅲ全巻において1章ないし2章の執筆を担当。本書の第一章「近代日本社会調査史研究の課題」はシリーズⅠの冒頭を飾る方法論序説であった。近代日本の社会観察・社会調査の歩みについて川合さんは、「新たな社会問題の噴出や戦時体制への突入といった動きを軸に」3つの時期に区分する。第二章の「松原岩五郎と横山源之助」は（i）萌芽期（1868-1914年）における社会観察を、また第三～第五章及び補論Ⅰの「月島調査」とその関連調査、並びに、第六章「民勢調査から国勢調査へ」は（ii）展開期（社会調査輩出期・方法論生成期、1915-1931年）の調査活動を扱い、第七～九章は（iii）制限期（崩壊期、1932-1945年）において狭隘化していく社会調

査論と、「失業調査」における問題設定のありように迫っている。

もとより、近代日本における社会調査はこれらにとどまるわけではない。多様な広がりの詳細は『近代日本社会調査史』に譲るとして、川合さんは、どうして上記諸調査をとりあげその読解に挑んだのだろうか。その所以は直接語られていないが、背景には、「全般的には、第2次大戦に至るまでのわが国の社会調査の歴史は、きわめて貧弱であった」（福武直『社会調査』岩波全書）とする調査史観をくつがえしたいとする意思があった。福武氏の当該箇所の文章を改めて読んでみると、『日本の下層社会』や高野岩三郎の労働者家計調査（「月島調査」には言及されていない）、国勢調査の実施、官庁・民間の調査機関の設置、戸田貞三の『社会調査』に簡単に触れた後すぐ続けて「貧弱」という指摘がなされていることに気づく。川合さんは、そのように断定を下す前に、「われわれ自らが戦前・戦後を通じてわが国の社会調査史を丹念に発掘し蓄積していく試み」こそ「貧弱ではなかったか」と問う。「どんな調査活動が、誰によって、いつ、どこで、何故、どのようにして行われたのか」。個々の調査の全体像を掘り起こす若手研究者たちとの共同作業のなかであって、川合さんは、「固定的な分析枠・研究史観」「辛抱の足りなさや新しがり屋」のために「内容や方法論についての具体的検討がなされないまま」、あまりに簡潔な歴史記述のなかに押し込められた営みについて、ひとつ一つ、十全なる復権をはかろうと志し自らの力を傾注していった、そう受けとめるのは穿ちすぎだろうか。

近代日本において、社会調査がどのような軌跡をたどったのか。その軌跡にアプローチする川合さんの「基本的な問題構成」は、「経験的

な社会観察・社会調査が繰り返されていく三つの可能性— (i) 国家権力・行政権力による統治の必要から実施されていく行政調査, (ii) 主として民間の側から社会問題の実相や実態を知り、あるいは広く訴えて、それらの社会問題の改善・改革・変革を求めて社会観察・社会調査, 社会運動を試みていこうとする動き, (iii) 理論的な関心に支えられて既存の調査活動の検討や理論の現実的・経験的検証という関心による社会観察・社会調査への接近—これら3つ相互の相互媒介的（あるいは排他的）な関連を問うことにある。

本書を読み通してあらためて思うのは、第一に、個々の社会調査の全体像を再構成して、社会調査活動による成果から、時代時代の歴史像・生活像と、その解明に挑んだ社会調査家の営みを読み解くことである。川合さんは、社会調査が「人間生活を一層内容豊かにするための知的活動であり社会的実践活動の一環である」という根底的な発想にもとづいて、調査活動を絶えず反省的に検討し、歴史的に再考察していく。また、「ひとりの人間の歩んだ生涯、生活史、また個々繰り返られる調査と当時の同時代史的な関連や広がり」、いわば「縦糸と横糸の織りなす模様を探る」という基本的視点から、社会調査家たちの実像をとらえる。社会調査も「人々の生活をときには破壊し、ときには支えていく諸刃の剣である」。ひとつ一つの社会調査がどこまで当該の社会的現実を的確に把握していたか、川合さんはときに厳しく、ときにあたたかく見つめていく。

第二に、社会調査史研究という未開拓の分野を切り開く方法論を、川合さんが探求しつづけてきたことである。川合さんの独自性は、なによりもその社会調査観に表れる。

本書には、表題にそれとして記されていないのだが、「社会観察・社会調査と社会学」とい

う副題がある（「はしがき」）。このように川合さんは、「社会観察と社会調査」をつねにセットで用いている。なぜなら、(1) 日本人には江戸時代以来培ってきた社会観察の伝統—旅・探検・測量・出張・巡回・漂流・遊覧・写実・風刺など—があり、そうした「異化する世界を経験する」試みや、「人ノ意見」に依らず「物ニ問ウ」試みの蓄積のうえに、社会調査—多くの社会問題を眼前にしての積極的・自発的な社会探訪や社会踏査—が開花してきたからにほかならない（序章～第二章）。

と同時に、川合さんは(2)「人間の社会的・相互的コミュニケーション行為・過程」として社会調査をとらえる。すなわち、社会観察・社会調査というのは、「①特定の歴史的社会的文脈における社会的現実としての状況の、②人間事象・社会事象・生活事象についての経験的な調査研究であり、③（観察・調査方法、調査技法を含めて）人間の社会的・相互的なコミュニケーション過程であり、④それらを通じて社会的現実を再構成・構築し解明し、公表していく行為・活動・営みである」。川合さんは、「実際の社会的場面における人間行動に関するデータを収集し、それを解析することによって、対象とする人間行動について記述と説明することにある」といったような（社会学の辞典や社会調査の教科書にみられる）「調査者の側に起点を置いた、調査者の側からの」定義ではなく、「人間的な試みとしての社会観察・調査と学問的な試みとしてのそれ」との「円環・循環の構図」の中で社会調査を位置づけ、社会観察・社会調査と社会学的調査「相互の交流や活用による試行錯誤の試み」を大切にしていこうとする。（「終章」）

本書にまとめるにあたり、「わが国の社会調査の歴史」を「貧弱」とみなす歴史観について、

川合さんはこう問い直している。すなわち、結果的にわが国の社会観察・調査の歴史の「貧弱」「貧困」が指摘されたとしても、果たして近代日本の当初からそうであったのか、どのように、何故、「貧弱」「貧困」化していくことになったのか、と（はしがき）。このことについて終章は、一応の結論を次の4点にまとめている。

近代日本の社会調査は、(i) 社会観察・社会調査の「萌芽的な試み」が展開期を経て次第に「制限されていくことになった足跡」として跡づけられるが、他方において、(ii) わが国での「土着的・内発的な経験、学問的な蓄積」に眼を向ける姿勢が弱く、(iii) 人々の好奇心や社会観察・社会踏査と社会調査との間の関連や豊かな新鮮な可能性を「広義」（戸田貞三）の科学的な調査活動に狭く閉じ込め、(iv) 行政調査－民間の側からの社会観察・社会調査－理論的な関心による社会調査への接近、これら三つの動きが相互の調査活動を活用したりすることも乏しかった。

終章ではまた、戦後における社会調査の軌跡についても簡単なスケッチが試みられる。戦後日本の社会調査について川合さんは、「再建期」「活況期」を経て、1990年前後から「困難期」「分極期」にあるとし、その後、「密かな期待と希望と夢を込めて」「創造期を考えたい」とする。川合さんは、社会調査（とりわけ社会学者の調査）の「自足化」「閉鎖化」に警鐘を鳴

らし、「フィールドや被調査者と観察者・調査者との相互交通」構築の重要性を指摘して本書を閉じている。

P.トンプソン氏の『記憶から歴史へ：オーラル・ヒストリーの世界』（酒井順子訳、青木書店、2002年。原題The Voice of the Past: Oral History, Third Edition）をひもとくと、オーラル・ヒストリー活動が専門分野を問わずいかに多くの幅広い分野の人びとによって豊かに実践されてきたかを知ることができるだけでなく、社会調査がその世界でも大きな足跡を刻み貢献をしてきたことがわかる。また、村上文司さんの『近代ドイツ社会調査史研究－経験的社会学の生成と脈動－』（ミネルヴァ書房、2005年）は、社会調査の歴史を「出来事」史として把握しこれに関与した人々の「社会的営為」に焦点をおいて叙述していくという独自の方法によって、近代ドイツを生き抜いた人びとが、アカデミズムの内外においていかに多種多様な調査活動を繰り広げてきたか、その姿をいきいきと伝えてくれている。社会調査は決して閉じた体系にとどまっていたのではないのである。

（川合隆男著『近代日本における社会調査の軌跡』恒星社厚生閣、2004年3月、xvi+451+x頁、定価6400円＋税）

（はまたに・まさはる 一橋大学大学院教授）